

昨年11月のこと、広い舞台で有名な清水寺本堂にて国家安泰世界平和祈願祭が営まれました。僧侶と神職が同席するという、**明治初めに寺と神社が分離してからは初の行事**ということです。石清水八幡宮から運んだ神水と清水寺音羽の滝の水とを仏前に供え、齋主の石清水八幡宮宮司が仏前で平和祈願の祝詞を読み上げて、「天下^{きよはらい}清^{きよ}禊^{はらい}の儀」が行なわれております。そういえば、10月にも横綱朝青龍の土俵入り(通常は明治神宮で奉納)が特別に清水寺舞台で披露されるなど、神仏合同の儀式が二度も続いたこととなります。何か新しい動きでもあるのでしょうか？

神 神仏分離 明治に改元されたのは慶応4(1868)年9月8日ですが、まだ国家の基礎固めが出来ていない段階(3月)で、新政府は重大な布告を発令しています。意識して紹介しますと――

- ① 王政復古は神武創業の始めに基づくものであって、祭政一致の制度を回復し、**神祇官**を復活させ、全国の神社や神職を神祇官に付属させる。(3月13日)
- ② 神社で別当・社僧と称し、神職と兼務している僧は復職(還俗)のこと。(3月17日)
- ③ 仏教式名称(権現、菩薩など)を神号とする神社は由緒を申し出よ。また**仏像を神体**とすることを禁じ、**神社から仏像、梵鐘、仏具などを除去せよ**。(3月28日)

最後のものがいわゆる「**神仏分離令**」と呼ばれますが、今日にまで影響する大問題となります。要旨は、神道を国教にして、渾然一体であった仏教を切り剥がし、排斥しようというものです。欧米文明を摂取しようとする新政府が、これまでの外来文化(仏教)を否定しようとしたわけです。

天皇を戴いて国を一本化するには神道こそ最適、徳川時代を抹殺するためにも特権的な存在の寺院には退場してもらおう、それが欧米諸国に追いつくための近道だ、という理屈でした。

お寺側が弱い立場になった一方で、神社側を代表する人々――神官・神道者・国学者など――が勢いついたことは当然のことでした。実際、この後とんでもない騒動(**廃仏毀釈**)が日本中で起きるのですが、**大隈重信**は後の明治末年頃に下記のように述懐していますよ。

廃仏毀釈の動きは、神道者・国学者・および漢学者が主唱したもので、彼らが仏教に対する積年の怨恨を晴らそうとしたものである。最初は政治上から別段注意をすることも無かった。これが事実である。……(中略)……

仏教儒教の伝来以前の日本に遡って復帰しようとしていた。神仏^{こんこう}混淆しているのを改革し、神仏分離を図ったのは当然の措置と考えていた。……(中略)……

僧侶の中には復飾を喜び、廃仏毀釈の一味に嬉々として加わった者も居る。数多くの寺院が破却され、また仏像や仏具などが打ち棄てられた。そういう中には国の宝とも言うべきものも含まれていたかも知れない。……(中略)……

神仏共に次第に勢力を失い、新たに勢力を得ることになったものは、独り欧米の文物思想であった。
(『明治維新神仏分離資料』より)

どうやら、新政府としては寺院に対する破壊活動まで起きるとは考えていなかったようです。しかし、実際には想像を超えたレベルで展開されたわけであり、それだけ根深いものがあったということです。「積年の怨恨」とは穏やかではありませんが、それは、徳川幕府が政策として行い、永く徹底してきた「**寺請制度**」ならびに「**宗門改め**」といったものに起因しています。

寺請制度 徳川幕府の政策ですが、つまりは、お寺が役場の役目を果たしたということです。大きな目的は、キリシタンを取り締まること、および庶民の動きを監視することでした。

庶民にはいずれかの寺院に所属して、**旦那寺**を持つことが強制されました。旦那寺は所属員が自派信者であること＝キリシタンでない、と保障するのですが、これを「**宗門改め**」と呼びます。

また、結婚・離婚、移住・転入、死亡、土地の売買、および旅に出る時など、あらゆる機会に寺から証明書を発行してもらわねばなりません。それを奉行所に提出する必要があるからです。従って、庶民から見た**寺**というものは、「**信仰**」と「**権力**」の両側面を持った存在であったのです。幕府は寺に対し特権的待遇を与えて財政的支援も行なったし、寺側はそれに安住したわけです。

神仏習合 神社思想と仏教の特徴を表にしましたが、この二つが混じり合い、融合しているということです。明治以前には当たり前の姿でして、祀られている神様についても、それは

仮の姿、本物(本地)は阿弥陀や菩薩なのだという「**本地垂迹**」^{ほんじすいじゃく}が一般に浸透していたのです。(例えば、伊勢神宮の本地は廬遮那仏、八幡神は阿弥陀仏、熊野権現は阿弥陀如来、など。)

〇〇権現などと神社が仏教式の名前で呼ばれていたというのも、こういう背景があったからです。

しかし、**寺請制度**のため寺院は神社よりも強い立場にありました。僧侶が神官や神主を兼務し、運営上の実権も握っていたのです。一方、神社側は「積年の怨恨」をつのらせていたわけですね。

	神社思想	仏教	キリスト教
創始者	不明	釈迦	キリスト
教義	不祥	経典	聖書
崇拝対象	自然・神話の神々など	如来・菩薩など	キリストなど
偶像・象徴	無し	仏像	十字架
布教者	無し	僧侶	宣教師

(小学館『神社の見方』 より)

廃仏毀釈 大隈重信の述懐通り、寺院の破壊運動が堰を切ったように広がりました。ことに運動が激しかった地域である、**伊勢**(伊勢神宮のお膝元)と**富山**について見てみましょう。

【伊勢】 度会府では、明治2年の明治天皇行幸を控え、伊勢神宮参道周辺の寺院をすべて取払うよう指示が出た。6宗派(天台・真言・浄土・臨済・曹洞・真宗)合計286カ寺のうち、195カ寺が廃寺対象(廃寺率は約70%)になった。

【富山】 大参事・林大伸が、宗派毎に1カ寺に統合せよと指示。合計1,635カ寺が8カ寺(廃寺率は何と99.5%)になるという騒ぎとなる。この時は各宗本山から明治政府に上訴がなされ、政府もようやく事の重大性に気付き、明治9年までかかって、ほぼ事態は収束された。

曹洞宗と日蓮宗を除き、多くの宗派本山が集中する京都でも、仏像や仏具、その他銅器類など大半が破壊されました。なお、一部は鋳直され、**四条大橋の鉄橋**(1868年架橋)に転用されました。また、神社の名称変更も強制されて、1868年4月の**石清水八幡大菩薩**が「**八幡大神**」になったのを皮切りに、**北野天満宮→北野神社**、**愛宕大権現→愛宕神社**、**感神院祇園社→八坂神社**などの例があります。神社と共に在った寺院(神宮寺)は、またたく間に移転もしくは廃寺となっています。

民間信仰も同様で、盂蘭盆会の施餓鬼・送り火・六斎念仏、さらには地蔵盆も禁止とされました。奈良**興福寺の五重塔**が50円で売りに出されたのも、こういう時期のこと。驚きますねえ。

上知令 簡単に言えば、政府が寺院の土地を没収(上知)したということです。通常ならば
 替え地を与えるのですが、明治政府は代わりに米を渡すものの、土地は与えませんでした。

土地の没収といっても、全部ではありません。堂宇(建物)とか宗教上の儀式や法要を営むのに
 必要な土地はそのまま、付随の山林や田畠などを本来は不要のものとして取り上げたわけです。

与えられる米の量ですが、没収する土地について米などの生産能力を計算し、その量の半分と
 定められました。従って、広い山林や田畠を持つ寺院であればあるほど、打撃は大きいのです。

尚、上知令はもう一度、厳しく改正されました。改正された点は、代わりに渡される米の量は
 毎年一定割合を減らしていき、11年目にはゼロにするというものです。過酷な内容でしたから、
 “引き裂き令”などとも呼ばれました。因みに、主要な寺院の上知例を見ると下表の通りです。

寺院	全面積(坪)	残った面積(坪)	没収面積(坪)	没収率(%)
鞍馬寺	357,000	24,000	333,000	93. 3
清水寺	156,463	13,807	142,656	91. 2
大徳寺	69,000	24,000	45,000	65. 2
相国寺	70,000	27,000	43,000	61. 4
東本願寺	46,000	18,000	28,000	60. 9
建仁寺	54,000	24,000	30,000	55. 6
知恩院	60,000	44,000	16,000	26. 7

余談ながら、こうした上知令の結果が新京極通りを生み、小学校の敷地にも転用されたのです。
 寺側からしますと単に土地や財産が減ったというだけではなく、地縁結合も弱めたわけです。

維新 出典は中国の古典『詩経』で、「周雖旧邦、其命維新」(周は旧き邦なれども、
 受けし天命こそ新たなりけれ) というものです。

神仏分離・神道国教化政策は天皇家にも影響を及ぼし、例えば、民俗行事にあたるもの(節分や
 節句、七夕、盂蘭盆会など)が改廃されたほか、葬式も従来の仏教式から神式に変わりました。
 当時の宮家・山科宮などは仏教式の葬儀を望みましたが、枢密院で否決され、叶いませんでした。
 余談ながら、結婚式を神式で行なうことは現在では普通ですが、大正天皇が初めての例ですよ。

また、仏教的色彩を吸収すべく、宮中に在った仏像・位牌は京都泉湧寺に集約されました。
 門跡寺院と呼ばれ、天皇にはなれない皇族が門主をしていましたが、すべて還俗となりました。
 普通、天皇家といえば昔から神式だと考えがちですが、実際は、きわめて仏教的だったのです。
 実情を見れば、**仏教徒であった天皇家は国家的な政策によって神式に変容した**と言えます。

さて、神社思想と国家神道とは似て非なるものです。先述したように神社思想には教義は無く、
 現人神と呼ぶような崇拜対象を本来は持ちません。いわば万物生命教のような性格を、都合良く
 歪められた揚句、極論すれば、**仏教を殺す政策で仏教が減っただけではなく、神道すらも殺して
 しまった**かも知れません。その結果、信仰の世界・精神的な世界が縁遠いものとなりました。

時に、オウム真理教(現アレフ)に関わる事件、宮崎俊監督の映画『千と千尋の神隠し』、あるいは
 安倍清明がもてはやされる現象など、どうも根っこは同じなのではないかとさえ思えて来ます。
 霊的・宗教的なものに対して無防備で、憧れだけが先行する、そのような印象です。ユダヤの民は
 祖国を失い放浪したのですが、日本人は霊的・宗教的なもので彷徨するのでしょうか。